『狂食の時代』

（ジョン・ハンフリース著／永井喜久子・西尾ゆう子訳　講談社）

著者は英国の著名なジャーナリストでＢＢＣのニュースキャスター。英国は狂牛病が大パニックを引き起こした最初の国である。17万頭がＢＳＥを発症し、470万頭を処分・焼却した。

英国では88年に牛や羊の死骸を牛の飼料に混入することが禁じられた後、その代替策として鶏糞を混入することが大々的に行われた。これは91年には禁止されたが、翌92年にＢＳＥ発症がピークに達した。

その有力な要因として、硬い殻の鶏卵を生ませるために飼料に大量のマンガンを入れたことが考えられている。マンガン鉱山の鉱夫が罹患する中毒症状がＢＳＥに酷似していることはかねて指摘されている。

本書（原題はThe Great Food Gamble）は、世界を襲いつつあり、地球上の全ての生命に危機をもたらしている様々な問題の底に横たわる共通項として「食」の問題に注目し、抉り出している。類書は多いが、本書はとにかく筆致がビビッドで説得力があり、一気呵成に読ませる。

「殺虫剤の毒性試験に使用される動物は、同じ室内に入れられ、そこは温度、湿度、換気がコントロールされている。完璧にバランスのとれた餌が与えられ、飲むのは水だけ。同じ飼育業者から購入され、同じような成長段階・体重で病気には罹っていない。与えられる物質以外からはいかなる影響も受けないようになっている。動物実験がこのように非現実的状況で行われるため、得られたデータを人間にまで広げて推定するのは殆ど無意味である。人間は皆違っている。肥満の人、食欲不振の人、年齢差も百歳以上ある。グラフにきれいなカーブが描けるよう意図され、説明が必要な例外現象は起きないよう配慮されている。」とのくだりを読んで私は目から鱗が落ちる思いであった。

また複数の化学薬品の「カクテル効果」、ある化学薬品が他の化学薬品と一緒になると何が起きるか、その混合物に晒された生き物はどんな影響を受けるか。英国食品安全管理局が「カクテル効果」調査のワーキンググループを立ち上げ、高官が「会合は年６回開かれる」と誇らしげに説明したが、「対象となる約四百の化学薬品の組み合わせは膨大な数になるが、一度の会合にどれだけ扱うのか。」との質問に答えられなかった話。

さらに絶え間なく薬品、抗生物質を投与される養殖サケの話、利殖のため自然をはるかに凌ぐスピードで成長させるための遺伝子組換え飼料とピンク色を出すための着色料とを投与される。飼料の高濃度の油分のため絶えず下痢をして肉は柔らかくなる。インフルエンザ、心筋症、膵臓疾患等々長いリストが必要な病名を持つ。これらがスーパーの店頭に「入荷したて」の謳い文句で売られる。

遺伝子組換え飼料で、子牛を育てるのに必要な量の数倍の、年に一万リットルもの乳を出す（出させられる）牛の話等々。

利益のため、効率最優先の畸形的事例が延々と続くが、近年人類の社会（つまりは地球の生命体系）に起きている数多くの病理現象の底に横たわるものに慄然とさせられると共に、生命体系を長く維持するための循環型かつ持続可能型社会に早急に向かわねばならないことを痛感させられる。

（2002年３月　￥1,995（税込み）289頁）

（平岩　直）